

第4回 質問に答えて

今回は今まであった質問のいくつかに答えておきます。

一とりなしの祈りについて

私たちは自分で神さまに直接祈ることができる。ただ私たちの霊的な力が弱いのか信仰が弱いのか、なかなか神さまにアクセスしにくいということはある。そこで、とりなしの祈りが強力な援軍になってくれる。

一番のとりなし手はいうまでもなく、イエス・キリストである。彼がメシアとして、私たちの救いをとりなしておられる。「この方（イエス）は常に生きていて、人びとのためにとりなしておられるので、ご自分を通して神に近づく人たちを、完全に救うことがおできになります」（ヘブライ 7,25）。私たちがイエスに祈るとき、イエスがおん父へととりなしてくださるので、私たちは救われるのだ。これがキリスト教の信仰の基本であり、祈りの基本である。

それだけでなく、聖霊もとりなしてくださる。「私たちはどう祈るべきか知りませんが、”霊”自らが、言葉に表せないうめきをもってとりなしてくださるからです」（ローマ 8,26）。私たちが聖霊に心を開いて祈るとき、その聖霊がとりなしの祈りをしてくさるのである。

カトリックや正教会ではさらに、聖母マリアのとりなしの祈りにも信頼している。カナの婚礼でぶどう酒が不足したとき、聖母がイエスに「ぶどう酒がなくなりました」ととりなしをされる。イエスは否定的な反応をしながらも、結局、水をぶどう酒に換える奇跡をなさった（ヨハネ 2,1-11）。これはマリアさまのとりなしの祈りのおかげである。だから、ロザリオの祈りのように、聖母マリアを通してとりなしの祈りをするとき、神はその願いをかなえてくれるのである。また諸聖人や福者にもとりなしの祈りをするところがある。彼らの功德によって、神が聞き入れてくださるからだ。例えば、捜し物をするときは、聖アントニオ（あるいは聖コルベ）に頼むとか、聖人の場合は得意分野があるので、それに合わせてとりなしの祈りをするとうい。最近では、マザー・テレサや聖ピオのとりなしの祈りがよく効くという評判である（あんまりこれに凝ると、本質からずれるおそれはあるが）。

このようにとりなしの祈りをするのは、キリスト教ではごく普通のことである。マリアさまや聖人のような強力な祈りはできないだろうが、私たちがとりなしの祈りをすることもある。家族や友人で苦しんでいる場合、その人のために必死でとりなしの祈りをするところがあるだろう。「どうか病気がいやされますように」、「今の苦しみから解放されますように」ととりなしの祈りをするのはごく自然なことである。ミサの共同祈願もとりなしの祈りだと言えるだろう。自分のためだけではなく、まわりの苦しんでいる人のためにとりなしの祈りをするのは、すぐれて愛の行為である。日々の祈りの中で、自分のために祈るだけでなく、まわりの人のためにも祈る習慣をつけるとよいと思う。

一心からの祈り

私たち人間はどういう能力を使って祈るのだろうか。もちろん口禱の祈りの場合、口を使うことになる。沈黙の祈りの場合、口を使うこともないし、言葉を発することもない。口禱であろうと、沈黙であろうと、祈るときに必ず使う人間の能力がある。それは「心」である。心を使わないで祈りは成立しな

い。知性（頭の働き）をあまり使わないで祈ることはできる。歌で祈る場合、あんまり頭で考えることは少ないだろう。しかしながら、心を全く使わない祈りはありえない。なぜなら祈りは根本的に愛の動きから生まれるものであり、愛と心はいつも深い関係にあるからだ。全く愛さないキリスト者がいるだろうか。それと同じように、全く心を使わない祈りもありえないのである。

ただもちろん、強く愛することもあれば、少しだけ愛することもある。祈りに心を含める場合も同様である。ものすごく心を含めることもあるだろうし、少しだけ心を含めることもあるだろう。もし恋人が家に訪ねてくることを想定してみよう。その恋人と熱烈に愛し合っているならば、ものすごく心を含めて一緒に食べる食事を準備するだろう。逆に、もう倦怠期を迎えている夫婦ならば、あんまり心を含めて食事を作らなくなるだろう。どれだけ心を含めるかは、その人の愛情の度合いに左右されるのは間違いない。

理想的にはパートナーを変わらない愛で愛していききたいものだ。それと同様に神さまに対しても、変わらぬ愛で愛し続けていきたい。人間の愛は移ろいやすいものだが、神さまはいつも変わらぬ愛で、私たちが愛し続けているのだから。その愛に応えて、私たちもなるべく心を含めて祈りたいものである。

心を含めるのは、別に祈りの時だけの心がまえではない。むしろ日常生活の中でこそ実践すべきことではないだろうか。一番思い出すのは、佐藤初女さんである。ご存じの方もおられるだろうが、弘前で「森のイスキア」と呼ばれるいやしの家を主催されているカトリック信者である。苦しんでいる多くの人が彼女の元に訪れ、彼女に悩みを打ち明け、彼女のおいしい料理を食べているうちに、人はだんだんといやされていくのである。

何回かその初女さんと共に過ごすことがあった。彼女を見ていると、「心を含める」というのはどういうことかよく分かる。彼女はおにぎりを一個握るときにも心を含めて握るので、とてもおいしいのだ。挨拶をするとき、人を話を聞くとき、料理を作るとき、その一つひとつに心が込められているので、彼女に接する人は皆いやされる。

彼女が嫌いな言葉は、「めんどくさい」と「手抜き」である。めんどくさいから手を抜いていくとき、その料理には人を生かす真の力はなくなっていくだろう。現代社会では、多くの方はめんどくさいことはいやになって、手を抜き、あまりに手軽なものを求めるようになってしまった。この忙しい世界で、心を含めるのは時間もかかるし、大変なことかもしれない。でも忙しいから手抜きでよいとなってしまうならば、能率や効率はよいかもかもしれないが、人間不在の愛のない殺伐とした世界が広がっていくのではないだろうか。祈りも同じである。めんどくさくなって手を抜いてしまうならば、その祈りには何の効果ももたされないだろう。心を含めて祈るとき、祈りに命が吹き込まれるのではないだろうか。心を含めて料理を作るとき、その料理は真に人を生かす力になるだろう。心を含めて人と接するとき、人と人の間に愛情がはぐくまれ、皆が幸せになっていくだろう。隣人愛の基本は、心を含めていくことではなかろうか。

一祈りの中で神の導きを知るには

神さまが私たちが導いておられるのは確かだが、それはどのようにすれば分かるだろうか。普通は、黙想の中で、過去の体験をふりかえってみることである。その時は分からなくとも、後からふりかえると、ああこういう風に神は導いておられるのだと分かることは多い。

現在と未来については、霊的識別をしながら慎重に神のみ旨を探していくのが本筋である。それはいつか取りあげたいテーマの一つである。

ただ一つだけ語るならば、未来については分からないのが普通である。すべて神の導きが分かっってしまうならば、たぶん人間には自由がなくなってしまうだろう。漫画のドラえもんでそういう機械が出てきたことがある。迷ったときに、必ずどっちを選んだらよいか教えてくれる未来を指示する機械である。テストの答えも、買い物で何を買うかも、すべてどっちを選んだらよいか教えてくれるのである。そういうモチーフの物語は他にも多々ある（例えば、よく当たる占いも同じ）。結末はすべて同じような悲惨なものになってしまう。機械の指示に忠実ならば、どんどん成功していくが、その指示に逆らうととたんに失敗してしまう。そのため、さらに機械に指示を仰ぎ、いつしか機械なしには生活が成り立たなくなり、もう自分で何も決められなくなってしまうのだ。結局、その機械に縛られて、人間は奴隷のように不自由になってしまうのである。

だからこそ未来については次の原則が大事である。神さまは私たち人間がより自由に、より愛にあふれた者になることを望んでおられる。その道は自分で探し、決め、歩まねばならないのである。神さまは人間の自由をとことん尊重してくださるのだから。神さまを信頼しつつ、未来に向かって、自由と愛の心で前進していきたいものである。